

## あとがき

### — 解題にかえて

山口大学大学院東アジア研究科 教授 浜島清史

HAMASHIMA Kiyoshi

以上が2023年11月17日（金）、山口大学経済学部教育講演会 吉川洋先生「日本の経済の現状と課題」ならびに同研究会ⅠⅡ「マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーターの講演録ならびに関連する研究ノート（加藤真也氏）ならびに講演報告書（寺地伸二氏）である（タイトルはそれぞれを参照のこと）。

解題に変えて、吉川洋先生の教育講演会・研究会に至った経緯と企画・企図、望まれる波及効果などについて述べておこう。元々、吉川洋先生をお呼びしようとした経緯は、山口大学時間学研究所で、2016年1月25日（2時）、経済物理学の創設者といわれる高安秀樹氏との合同講演会として企画したことに遡る。ご存じの通り、高安秀樹氏は、イェール大学で経済物理学をアベノミクスの創始者の一人浜田宏一氏と考案したといわれている。<sup>1)2)</sup>

かかるテーマを選んだのは、当時、浜島が所属していた時間学研究所においては、文理融合、学際的な研究が行われており、物理学者も数名おられたから、ここで経済物理学による経済学と物理学の統合的な研究も、時間学研究所、ひいては山口大学総体にとって知的な創造的な刺激と波及効

果が見込まれると考えたからである。とはいえ、講演会当日、大雪に見舞われ、吉川洋先生の方が羽田空港まででストップしてお帰りにならざるを得なくなり、結局、高安秀樹氏のための講演会となった。とはいえ時間学研究所所員の先生方、また学外からもご参加・ご発言があり、こちらは盛況のうちに幕を閉じた。

それから数年が経過し、経済学部教育講演会の知らせが舞い込んできたので、渡りに船と再び吉川洋先生に依頼することにし、ご快諾を得た。高安氏との相乗効果は遠のいたものの、物理学や理系の先生方とのより学際的な議論は、当日の講演会でも相交えることができた。

しかも大著、吉川洋（2020）『マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター』岩波書店を上梓されたところであり、より期は熟した感があった。11月の講演会に先立って、10月末に令和5年度の「文化功労者」に吉川洋先生が日本国政府から選ばれたとニュース報道が飛び込み、花を添えた形となった。この年の「文化勲章」が岩井克人先生（東京大学大学院経済学研究科名誉教授）であるから<sup>3)</sup>、次期の文化勲章は吉川洋先生となるであろう。

1) この辺はウィキペディア等も参照している。

2) 吉川洋氏はアベノミクスやリフレ（リフレーション）派に対しては批判的と思われるが、吉川氏と浜田宏一氏には共著もある。浜田宏一・黒田昌裕・堀内昭義編（1987）『日本経済のマクロ分析』東京大学出版会、第2章、吉川洋「景気循環：各産業の生産調整」。

3) なお司会進行（浜島）は、学部生の時だったが、岩井克人先生と佐和隆光先生（後の佐賀大学学長）の合同講演会を企画・司会進行をしたことがあったことを懐かしく思い出す。その時のテーマは経済学方法論であった。当時、岩井克人先生は『ペニスの商人の資本論』筑摩書房（1985）、佐和隆光先生は『経済学とは何だろうか』岩波新書（1982）、などの著書を出されており、経済学方法論は格好の相性と思われた。学部生当時から講演会等で学識者から学知的な相乗効果・波及効果を期していたのだとおこう。

さて、司会進行（浜島）が、この企画を組んだのは、教育講演会においては、山口大学経済学部においては、まえがきでも言及したように、自分の担当科目の労働経済論や社会政策論を含めて、ノーベル経済学賞に連なるような新古典派経済学主流派の「マクロ経済学のミクロ的基礎付け」のような議論はほとんど紹介されていないようであったからであり、山大の経済学徒たちにもその一端を味わってもらうのは有意義であると考えたからである。自分の授業でも、近代経済学やマルクス経済学のエッセンスを語ることはあるが、到底、主流派の本格的な議論に太刀打ちできるべくもない。

司会進行（浜島）が、吉川洋先生の業績に驚嘆するところは、新古典派経済学主流派「マクロ経済学のミクロ的基礎付け」の議論、すなわち内生的成長理論、ルーカス（批判）、そこではOJTやランバイドゥーイング、などを駆使した、魅惑的な議論が展開されているが、それらを徹底的に批判していることである。マルクスは古典派経済学の徹底的な批判の上に独自の経済学を構築した。同様なことを吉川洋氏は、高度な数式を駆使するようになった新古典派の経済学の数式を丹念に追うことによって、その限界までも明らかにしようとしてきた（吉川2000）。さらに経済物理学にまで昇華させた（止揚といたい）（吉川2022）。（研究会Iの文献参照）

残念ながら、ポスト・ケインジアンや制度学派では（山大教授陣ではないが）、ポスト・ケインジアンや制度学派の先行研究も膨大に存在するた

めもあろう、新古典派主流派のかかる議論を吉川氏ほど真っ向から批判して、対置する議論を打ち立てられてはいないように見受けられる（かかる先行研究サーベイやその批判的検討は別稿を期したい）。

また吉川洋先生の議論も、今回の研究会でも表明されたように、今後の若い研究者に引き継いでもらうべき、検討されるべき残された課題も幾多あるであろう。今回の教育講演会・研究会I IIで挙げられた質問は、該当箇所をご覧頂くとして、他にも、以下のような諸点を思いつく。

既に研究会Iの配布資料の項で言及しているが、吉川（2022）で吉川他（2011）を通して、経済物理学の方向へ到達されたが、吉川（2000）で展開していたような、産業構造論・産業連関論への方向を極めることは、今後の方向性の可能性もありうるのではないか？吉川（2000）では、新古典派にないのは産業構造論的の把握であると喝破している。また吉川（2000）でみせたアーサー・ルイスの二重経済論モデルを発展させた3重経済モデルを展開されていた。この方向性も開発の可能性は残されているのではないか？<sup>4)</sup>

他にも幾つも語りたことはあるが、今回の吉川洋先生の教育講演会・研究会I IIが、（表紙の裏面）「向かい受ける山大教授陣」としてご報告・ご質問をして頂いた先生方はじめ、山大経済学の多くの先生方にご参加ご意見をして頂いた。これを契機に、山口大学経済学とご賛助頂いた鳳陽会とのさらなる学術的教育的発展に結実することを祈念する。<sup>5)</sup>

4) また、同一価値労働同一賃金においては、異業種における労働の質を比較するよう膨大な調査が試みてこれたが、これについてもうかがいたいところである。

5) 講演録は、浜島ゼミの、秋本幹太、石崎さくら、川上真治、赤松健汰、熊安連、井上花菜、各氏に掘り起こしてもらった。敢えて記すべきと思われる。もちろん最終的な文責は私浜島にある。講演録を聞き直すと、司会進行であたふたしていた時よりも、簡潔的確な表現はもとより、その内容の奥深さに感銘する。なお吉川洋先生には懇切丁寧に修正も施して頂いた。感謝感激である。